

『ビブル・モラリゼ』(オックスフォード=パリ=ロンドン版)における
「イコノクラスム」と「未完成」の問題 — 偶像と青銅の蛇をめぐる —

竹田 伸一 名古屋大学

『ビブル・モラリゼ』はフランス王家のために制作された挿絵付聖書で、聖書テキストと図像、教訓的解釈のテキストと図像が一組となるよう構成される。本発表では13世紀に制作された5組の『ビブル・モラリゼ』を扱い、中でも1240年代に制作されたオックスフォード(ボドリアン図書館、Bodley 270b)、パリ(フランス国立図書館、Latin 11560)、ロンドン(大英図書館、Harley 1526、1527)に分在する写本(以下「OPL版」とする)に見られる偶像及び「青銅の蛇」図像に見られる特異な扱いを対象に考察を行う。

マイケル・カミールは著書『ゴシックの偶像』の中でOPL版のパウロによるアテネ伝道の場面を取り上げ(『使徒言行録』17:23)、祭壇上に存在しないはずの「知られざる神」がキリスト磔刑像として描かれる一方、存在すべき偶像が空白のまま残される事態を指摘する。カミールはこの場面に関して聖書図像のみを取り上げるが、それに対応する解釈図像や他の偶像の図像を精査すると、偶像を彩色せず下絵で残した例や部分的に抹消した例が他にも多数あることが分かる。

第一にロバート・ブラナーによる本写本における彩飾画家の「手」の分類によると、それらはすべて同一工房、同一チームの画家たちに帰属する。第二に本写本をモデルとして約50年を隔てて制作された『ビブル・モラリゼ』写本(大英図書館、Add. 18719)ではこうしたOPL版の未完成の部分や部分的抹消に対応する挿絵において、既にその影響を反映する表現が見られる。以上からOPL版の写本制作の現場と近い状況、おそらくこのチームの画家たち自身によってこのような表現が意図的になされたことが推測できる。発表では個々の事例を取り上げ、このような特異な扱いがもたらされた背景と理由を多角的に考察する。

続いてOPL版写本における青銅の蛇図像の部分的抹消についても、同様の文脈で理解できることを提案し、青銅の蛇に関する神学的解釈や図像表現の系譜を援用しつつ、その背景を中世における青銅の蛇の両義的解釈に探るとともに、本写本におけるキリスト磔刑像の扱いと連動させた解釈を展開する。OPL版の青銅の蛇の図像の制作もブラナーの分析によると、実はこの同一チームが担当している。

OPL版はトレドの『ビブル・モラリゼ』(トレド大聖堂、Toledo I、II、III。ピアモント・モーガン図書館、M. 240)の不注意なコピーと一般に評される。しかし、今回の考察でOPL版が特定の意図を持った図像表現であり、そのテキストもしばしば吟味され、改変されていることを明らかにする。また、中世写本に対するイコノクラスムは宗教改革時代やヴィクトリア朝時代の破壊や修正としばしば考えられてきたが、中世の同時代にある種の画像破壊や類似の現象が既存したことを当時の社会的・宗教的文脈から論じる。

(たけだ・しんいち)